

Title	書評リプライ：失われゆく「過剰な想像力」のなかで
Sub Title	
Author	西田, 善行(Nishida, Yoshiyuki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2013
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.18 (2013. 7) ,p.171- 173
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評 目次のタイトル：「著者リプライ：」
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20130706-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評リプライ：

失われゆく「過剰な想像力」のなかで

西田 善行

1. はじめに

8人で執筆し、内容も多岐に渡る編著『失われざる十年の記憶』について、丁寧かつ的確な書評を頂いた小谷氏に、まずは心から御礼申し上げたい。

小谷氏に解説して頂いた通り、本書は「失われた10年」として語られ、もはや成長することのない、閉塞感に満ちた時代の始まりとして語られることの多い1990年代について、当時生み出されたテキストや資料から再考することを意図したものである。90年代当時、あるいはそれ以降も顧みられることのなかった別様の可能性としての90年代を描くという狙いがあった。

2. 「自己の他者性」の浮上

評者は、「本来性の神話」と「他者性の戯れ」をキーワードとし、「自己の他者性」が浮上するなかで、その両者が綱引きを演じた時代としての90年代を、本書の議論から読み取っている。大變的を射た視点であると思う。

「自己の他者性」への対応としての「本来性の神話」の浮上は、90年代を振り返る上で一つの重要な視点である。80年代的な表層的記号の戯れへのアンチテーゼとしての「本来的なもの」への回帰は、「モノよりココロ」あるいは「自分探し」という形で、物質的充足よりも内面の充足が謳われることにつながった。こうした謳い文句は、例えば学校現場での内申点の重視や、労働の場での「フリーター」や「契約社員」を、現在に比べればポジティブに語るものとして機能した。評者の指摘するように本書で取り上げた二つレベルでの言説、つまりマクロレベルで「自国の正史」を欲望する歴史修正主義（第5章）や、ミクロレベルでの「心理主義」を背景としたアダルトチルドレン言説（第8章）などは、「本来性の神話」を表す90年代的なあり様であったといえる。

一方で、本書は90年代に想像され、その後ついてしまった「夢のかげら」も含めて想起するという企図があった（20頁）。その意味で「他者性の戯れ」は本書が浮上させた90年代の可能性の一つといえるだろう。『スワロウテイル』で映し出された多くの移民の集まる「未来都市」（第2章）も、『セーラームーン』のファン・フィクションが描くアイデンティティ・セクシュアリティの複数性（第6章）も、マクロな、ミクロな自己のなかにある「他者」との戯れであり、90年代のテキストが生み出した別様な可能性なのである。

3. 「地方」と「労働」はどこへ行ったのか

本書は 20 歳以上年齢の離れた 8 人の執筆者、それぞれの視点から見た複数の 90 年代を描くことを一つの狙いとしていた。ただ 90 年代を語る上で、本書に欠落あるいは不足したテーマ・対象・視点があることは、評者のご指摘の通りである。欠落したテーマがあることは企画時から想定されたことであり、執筆者のみならず他の書き手によっても、今後モザイク状にそれが埋められていくことが、「90 年代」を地図化する上で重要である。評者から指摘を頂いた「地方」の問題と「労働」の問題は、本書に後続すべき重大な課題として残されている。

地方の問題でいえば 90 年代以降、地方は主要地域の道路交通網の発達と、地域間をつなぐバイパスへの大規模商業施設の増加により「郊外化」したことが、00 年代に広く認識された。三浦展が「失われた 10 年」における地方とその風土の消失を「ファスト風土」と名付け、『ファスト風土化する日本』を刊行したのが 2004 年のことである。その意味では本書で指摘した郊外に関する表象・議論は郊外化した地方においてもパラフレーズ可能である。しかし地方の郊外化の進行は、「限界集落」と呼ばれる村落地域の過疎化と一対のものである(山下祐介, 2012)。90 年代は「東京」と「地方」を引き裂いただけでなく、地方の内部でも「郊外」と「村落」を引き裂いたといえる。こうした状況を 90 年代に地域を描いたテキストのなかでどう表象されていたのか、あるいは表象されていなかったのかは、検討が必要であろう。

労働の問題についても様々なアプローチから考察可能である。1997 年の神戸連続児童殺傷事件が「心の闇」言説の乱用を引き起こした一方で(第 4 章)、2008 年の秋葉原連続通り魔事件では「派遣労働者」という労働環境が大きくクローズアップされたのは、90 年代とゼロ年代の視点の差異を物語っているように思える。もちろん労働の問題を主題化したテキストは 90 年代にも多く生み出されており、「リストラ」や「フリーター」は様々な物語のなかで描かれている。ただし 90 年代は「自分探し」の問題としてミクロな問題へと落とし込まれることが強かったのに対し、00 年代は「格差」の問題として社会問題化した印象を受ける。こうした観点からのテキストの読み直しは、90 年代と 00 年代の「画期」を探る上でも重要なものといえる。

4. 「ゼロ年代論」に向けて

「90 年代とはどの期間を指すのか」という評者から頂いた問いは、まさにその「画期」をどこに設定するのかという問いであろう。評者から提示して頂いた「93 年から 01 年」というのは了解可能な区分であり、バブル崩壊後の経済状況の深刻化した時期から、小泉政権が誕生し 9.11 の発生した 2001 年前後までというのが、「90 年代」として想起されやすい期間である。ただし本書では「90 年代」という区分をあえて固定化することはせず、執筆者の想起の文脈に委ねることとした。「複数の 90 年代」には、「複数の画期」が存在しており、あくまで個別の事例に沿う形で画期を設定する方が自然と考えたためである。

ところで本書は 2011 年に執筆し、2012 年に刊行されたものであるにも関わらず、90 年代を振り返るその視点の取り方が既に過去のものとして感じられる。本書の企画は東日本大震災が

発生する前に立てられたものであるが、震災の発生は本書のいくつかの章に変更を促すものとなった。その意味で本書は「ポスト 3.11」という色彩を帯びたものと言える。しかし 2012 年末の総選挙により自民党が政権復帰し、安倍政権が誕生して以降、「アベノミクス」という名のもと、既に「ポスト 3.11」ムードは後退し、震災と原発事故はもはや過去の出来事であるかのような様相を呈している。こうした現在の変化を語る上で「ゼロ年代」が振り返られるべきなのだろう。そしてその「ゼロ年代」を語る上で、本書は一つの手がかりを提示しているのではないだろうか。

本書の企画が立ち上がる際、編者として念頭にあったのは、90 年代にあった「自己」と「表象」との緊張感を描き出すことであった。「本来性の神話」と「他者性の戯れ」との綱引きは、「自己」をめぐる「表象」に現れるのっぴきならない緊張感の中で繰り広げられていたように思える。この 90 年代が作り出した「自己」と「表象」の緊張関係を、評者は「過剰な想像力の時代」という言葉で表したのだと思う。これが 00 年代に入り、「2ちゃんねる」などのインターネット掲示板やブログなど「わたし」の提示が辛辣な言葉によって語られるようになってくる。多様な「わたし」の「承認」を巡る語り（政治）は、「自己責任」や「空気を読め」といった言葉を用いたバックラッシュにさらされるようになり、「自己」と「表象」の関係は不具合をきたすのである。その意味で現在の「本来性の神話」の圧勝の下地は 00 年代に用意されたものであり、東日本大震災と原発事故という「危機」を経て、それを希求する度合いが急速に高まっているように思える。

「過剰な想像力」を可能にしていたものが何だったのかという問いは、90 年代への再・再考を促す。同時に 00 年代、何が「過剰な想像力」を不可能にしたのかという問いが、ゼロ年代論を語る上で重要な論点となるだろう。

【文献】

三浦展. 2004. 『ファスト風土化する日本—郊外化とその病理』洋泉社（新書 y）.

山下祐介. 2012. 『限界集落の真実—過疎の村は消えるか?』ちくま書房（ちくま新書）.

（にしだ よしゆき 法政大学大原社会問題研究所）